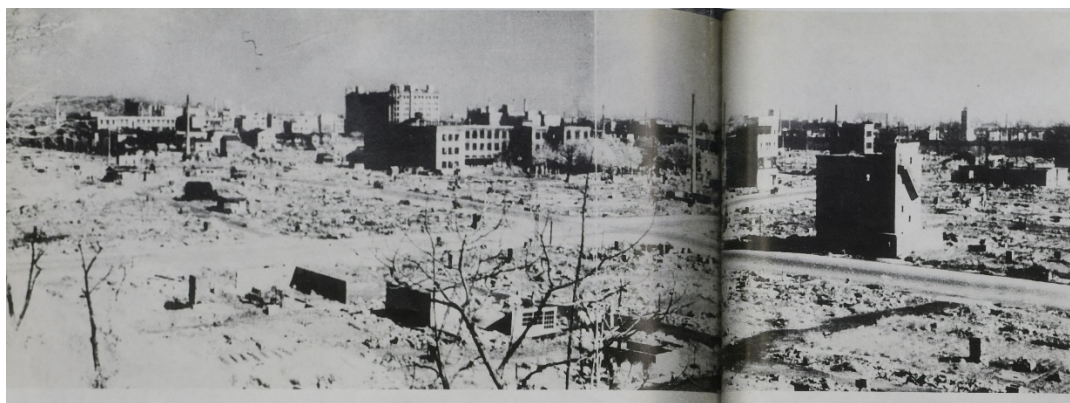


(8) 焼け野原の東京

疎開先から加藤が東京に戻ったのは9月のことである。上野駅に降り立った加藤の眼に映ったものは焼け野原と化した東京の光景であった。加藤の家も焼けてなくなっていた。しかし、加藤が目当たりにしたものは、建物がすべて焼き払われた焼け野原だけではなかった。「嘘とごまかし、時代錯誤と誇大妄想」、そういうものがすべて焼き払われた光景でもあったと思った。



(写真は上野方面を望む、左手高い建物は上野松坂屋、『千代田区戦争体験記録集』東京都千代田区、1997)

焼け野原の上には「広い夕焼けの空」が広がり「瓦礫の間に伸びた夏草」は瑞々しかった。それらは偽物ではなく、間違いなく本物だった。たとえ焼け跡であっても、嘘で固めた宮殿よりは美しい、と加藤は感じた。たとえあばら屋ではあっても、そこに建てられるものは、人間を大事にする思想であり、文化であり、政府であり、何よりも人間自身である、と加藤は考えた。加藤の胸には輝く希望が溢れていた。

いつも孤独を生き、対象に対する懷疑を失ったことがない加藤が、人びとや社会に対して何事かをなさんとする気概を無条件に強くもてたのは、焦土と化した東京の焼け野原を目の当たりにしたときにほかならなかった。